

大友館跡の保存についてのアピール

大分県地方史研究会 会長 豊田寛 三三

JR大分駅周辺総合整備事業にともなう発掘によって、中世とくに戦国時代を中心とする大友館および府内の町遺跡が相次いで発見されている。これまでは、高崎山城や上野の大友館跡は知られ、発掘などによって若干の遺物などは出土していたが、大友時代の府内の様相はほとんど明らかにされていなかった。ところが、これらの遺跡は中世府内の町部の姿をはじめてわれわれの前に示すことになった。

とりわけ昨年発掘された大友館のものと推定される庭園遺構や土塁遺構は、江戸時代に描かれた『府内古図』の大友館と見事に一致する場所で発見されており、大友氏時代の府内を解明する決定的な遺跡として注目されている。庭園遺構は同時期の戦国大名である大内氏、越前朝倉氏の庭園規模を上回る大規模なもので、大友氏の勢力の大きさを京都文化の影響などを見事に示すものである。

未だ館や町の全容は明らかにされていないが、西日本を代表する戦国大名の居館遺跡として大分のみならず、日本の重要遺跡として後世に伝えるべき遺跡であることはまちがいない。遺跡が発見されて以来、大分市やその周辺では、現在の大分の前身としての府内をもう一度見直そうとする動きがあり、大友館跡を中心に市民の保存運動が展開している。

長い間、大分県の歴史の解明に努め、文化財の保護に積極的活動を行ってきた大分地方史研究会としても、これらの遺跡の歴史のかつ現代的意義を鑑みて、即発掘調査地の保存への適切な行政的措置を強く望むと同時に、引き続き遺跡の調査が進められることを要望する次第である。